The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ナラティブのパラダイムに基づく社会心理学 : ディスコース上の自己
Author(s)	ウィッテ・デ, パトリシア
Citation	年報人間科学. 1991, 12, p. 67-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5294
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九九一年三月〕
『年報人間科学』第一二号六七頁―八三頁

ナラティブのパラダイムに基づく社会心理学

――ディスコース上の自己――

パトリシア・デ・ウィッテ

ナラティブのパラダイムに基づく社会心理学

ディスコース上の自己

本論の主題となるものは、言葉が如何に我々の感覚を支配し、如何に事象を生ぜしめるのかという問題である。即ち、社会的相互作用を構成し、様々な社会的世界を創造するために、言葉がどのように使用されるのかを自己を巡るナラティブから検討することが本研究の目的であった。そして、日本研究のために新しい方法論を追究する方向で論文のテーマを具体化させ、日本人及び西洋人の自己が如何に表出されているのかについての問題をディスコース分析の方法論によって洗練させようと試みた。

はじめに

はじめに、本論の考え方の枠組を明確にしておきたい。それは、第一に、メタ理論としての社会構成主義、第二に、方法論としてのディスコース分析、第三に、ナラティブのパラダイムからできている。

Gergen (1973) が指摘したように、社会心理学の研究とは、第一に歴史的作業である。言い換えれば、我々は、本質的にその場その時の事情を記述することに従事している。従って、科学的方法論を利用するとしても、研究の結果もたらされるのは、普通の意味での科学的原則を生み出すものとは言い難いだろう。

社会心理学における理論及び研究に関する分析によって、二つの不可避な事実が明瞭にされた。まず、社会が研究対象であるが故に、社会的な副産物である価値観が避け難いものとして存在している。科学的コミュニケーションを文化の言葉に依存して行なうなら、社会的相互作用を説明する時には価値を含まない概念など存在しないことを認めなければならない。次に、社会というものは、自然の事象ではなく、歴史的事象であるかぎり、社会における持続する創造と再創造に注目すべきである。この二つの事実を認めようとしない、自然科学に由来するメタ理論ではなく、それらを説明しようとする社会科学独自のメタ理論の設定が必要である。

本論で採用されるメタ理論とは、まず、知識をデータや経験的事実の必然性といったものから奮い返して、相互作用する人々の手に戻そうとするものである。この時、人間科学的叙述は、文脈に無関係な方法論的規則の個々人にかかわらない一般的な適用から得られるものではなく、むしろ、活発に相互作用をしている人達の現実によって構築されるものである。こうした見方をすれば、人間科学的合理性とは、独立した個体の精神に見出される筈はなく、社会集合体に見出されるべきものになる。人間科学における合理性の基盤を

成すものは、人と人の交渉によって世界を理解可能なもの（negotiated intelligibility）とすることである。言葉とは、本来的に他者との相互作用から生み出される社会的行為であり、そして知識とは、言語によって表現されたものであると言えよう。こうした言語表現は、社会的行為の産物である。この観点から見れば、知識とは、頭のどこかに最初からあった（ある）ものではなく、むしろ、人間の相互作用から生み出された（する）ものである。

一、社会心理学のメタ理論としての社会構成主義

社会構成主義においては、世界に関するディスコースは、単なる世界の反映と見なされるのではなく、むしろ、共同的相互作用における構成物として見なすべきだと強調される。言い換えれば、社会構成主義における主な課題とは、人々が生きている世界について、人が如何なる過程によってそれを表出し説明するのか、あるいはどのように記述しているのかを検討するということである。このように、人間的行為を説明する焦点は、精神の内面から対人相互作用の過程及び構造へと移ることになる。メタ理論的なレベルでは、こうした研究が次のいくつかの仮定として表される。

①世界についての経験と見なされているものそれ自体が、世界を理解するための条件を示すわけではない。世界に関する知識とは、帰納の、あるいは一般的仮説の構成や検証の産物ではない。

こうした疑問と共に、言語的慣習が人間が持つ理解力を限定するという問題への関心が着実に高まってきた。この問題に関して、Wittgenstein（1963）の研究は生産的であった。Wittgensteinは、心的述語（理解する、期待する痛いなど）の使用が、どの程度慣習（convention）に依存しているのかを指摘した。人間の理解力とは、言語的慣習によってしか可能にならないが、同時に言語的慣習によって限定されているということを、理解しなければならない。そのため、社会構成主義は、「当然のこととして思われる世界」（taken-for-granted world）を徹底的に疑う。その疑いが、科学の場合にせよ、日常生活の場合にせよ、全ての出発点となる。

②我々が世界を理解するために使う言葉は、社会的構成物であって、人々の相互作用の産物であって、それには歴史的変化が認められるのである。社会構成主義の観点からすれば、理解する過程は、物理的機能によって自動的に働くものではなく、むしろ、相互作用する人間の能動的な協力作業の結果である。

③ある理解の形態が、時を経るに従って支持される程度は、その理解形態がもつパースペクティブが経験的に妥当であるという理由からではなく、社会的行為の移り変わり（例えばコミュニケーション、交渉、衝突、レトリックなど）によって定められる。行動の安定性や繰り返しと関係なく、対話者の共同体によって、分かり易さ（intelligibility）が疑われたら、その概念は排除されることになる。それ故、人間を記述するために、人間を観察するという手段をとることが妥当かどうかが問題になる。「あるものが何

であると見なされるか」といった規則は、本質的に多義的であり、常に変化し、その規則を使用する人の先入観によって自由に変化する可能性もある。

④社会的生活では、交渉によって得られた理解の形態が、人間が普段従事する他の様々な行為の全体に関連している。世間の描写や説明自体が、社会的行為の形態を構成する。このように、理解の形態は、人間的行動の全てと絡み合わされている。

言語を行為として扱うことによって、従来の心理言語学における観点よりも、もっと社会的な観点が取られるようになる。言語が、様々な目標を持った個人の間におけるディスコースの行為様式として概念化されるためには、言語に内包された意味や社会的文脈を弁別するための、適切な条件や区別立てのシステムが考えられなければならない。こうしたものは、個人の所有物や創造物ではなく、共同体のレベルで共同生活としてなされるものである（Harré,1979）。即ち、こうした言語の性質は、ディスコースの研究が、社会心理学にとって、極めて重要であることを明確にするものである。

ディスコース分析の方法論によって、例えば自己の研究を行なう場合は、自己の真の本質を見出そうとするよりも、自己がどのように語られているのか、またはディスコースにおいてはどのように理論付けられているのかという問題に注意を向ける。即ち、自己の問題を追究するためには、自己の現象及び本質、あるいはその内容と構造を明確にすることよりも、むしろ、自己言及の言葉やレトリックの検討から始まる。つまり、人々の自己観が、実際には語りを通じて生産されるセンス・メイキングの集成体であるために、自己を説明するためには、センス・メイキングの方法が解決の鍵になるのである。

二、ナラティブのパラダイム

自己のナラティブ、または自己がナラティブの中にどのように表われているのかが本研究の関心の中心であるため、本論では、ディスコース分析の中でも、特にナラティブのパラダイムを扱うことにする。

Pepper（1942）によると、根源的暗喩を創造し用いることは、物事を理解するための普遍的な手段である。この意味では、ナラティブは「根源的暗喩」として、即ち人間のありようを概念化するための手法である。

人間は、ナラティブ的な構造に沿って考え、知覚し、想像し、また道徳的選択をする。例えば、二、三枚の写真、あるいは描写文を与えられた人は、殆どの場合、ある程度にパターン化されたやり方で写真や文章を並べ、関係づけてナラティブを構成する。よく見ると、その写真及び文章がプロットの利用によって結びつけられているということが分かる。幾何学的図形を知覚する場合、あるいは漫画のコマを順番に並べる場合、さらには、歴史的事件を理解する場合、これらのいずれにおいても、人間は常に未編集の資料を一貫したナラティブに整理しようと試みる。

心理学が成立するずっと以前から、人々は複雑なこの世界を理解しようとする人類の試みについて考え、語り合ってきた。ここ百年の間に、人間行動は科学的心理学によって検討されるようになったが、それにもかかわらず、未だ小説家、劇作家、詩人など全てのストーリーテラーは途切れることなく、人間の動機と行為について洞察を与え続けている。人間は経験の流れに構造を与えようとする自然な傾向を持つ。ここで、人間の行為を体制化する原理がナラティブである。ナラティブの創造、ナラティブの語り、そしてナラティブの理解は、Sarbin (1986) の言うように、心理学にとっても基本的な概念なのである。

まず、ナラティブは、どういう意味内容を持つのかを簡単に説明しよう。ナラティブとは、時間的な次元を含んだ、人間的行為に関する象徴的記述である。ナラティブには初まり、中間部、そして終結、あるいは少なくとも終結の感じを与えるもの（Kermode, 1975）がある。そして、プロット（筋）と呼ばれる認知のできるパターンによって、ナラティブが統一される。人間的苦境、そしてそれを解決しようとする試みは、プロットの構造にとって極めて重要である。

ここで、混乱を避けるために、プロットとスクリプトとの間の区別を明確にしておこう。辞書を引くとプロットは、「物語、演劇、映画等の基礎となる、相互に関連する出来事のセット」と定義されている。また、スクリプトは、「演説、演劇、放送等において語られる言葉の書かれたテキストである」。社会心理学において、スクリプトは「あるステレオタイプ的な出来事の系列についての知識」(Schank.R.C.et al., 1977) と定義される。Abelson (1976) は、意志決定、態度形成、日常の行動などにおけるスクリプトの役割を指摘した。即ち、我々の行動の多くは外界からの情報を積極的に処理した結果として生じるのではなく、ある手掛かりによって活性化されたスクリプトによって生じるのだと言うのである。従って、どのスクリプトが活性化されたかによって生起する行動が決定される。Langer (1978) は色々な情報を考慮した結果に基づいたものではなく、単に活性化したスクリプトに基づく行動を「思考のない行動」と呼んだ。こうしたスクリプトの定義は、プロットの目的論的な意味内容と、大いに異なっている。

ホモ・ナランスのメタファーは、Kenneth Burke (1955) による「人間はシンボルを使う動物である」という人間性の定義の延長と言えよう。「人間はナラティブを語るものである」という考え方は、全ての象徴的構成物の一般形態を規定する。その観念によると、シンボルとは、最終的に、ナラティブとして創造され、伝えられるものである。こうしたナラティブは、人間の経験に秩序を与え、共同生活を可能にするために、他の人々を自分のナラティブにとどまるように導く方法である。そして、その共同体の中で、今度は自分の人生を構成するナラティブが確認されるのである。

以上で述べたように、本論においては、社会的相互作用を構成し、様々な社会的世界を創造するため、言葉がどのように使用されるのかということが論点である。その際、ナラティブが、我々の社会的

生活において、構成的な役割を果たしているという考えが、本論の前提となる。ナラティブとは、事象を引き起こすように特定の方法で構成された複雑な文化的・心理的産物である。また、言葉は生き物であるため、記述は常に評価を伴うという事実も扱うことになる。人間が理性的動物だということ以上にレトリック的動物（rhetorical animals）であるということが重要だ、というのが核心となる前提である。

人のコミュニケーションをナラティブの観点から眺める際には、三つの要素を考慮することが必要となる。その三つの要素とは、メッセージ、メッセージを構成する個別形態（論証、メタファー、神話、身振り等）、そして第三に、（ナラティブ的な合理性によって評価された）語られたことの確実性、信頼性及び望ましさである。そこで我々には、レトリック的なコミュニケーションを伝統的な意味での「論証」としてではなく、ナラティブとして検討することになる。この観点を取ることが、少なくとも三つの区別を可能にする。第一は、象徴的行為の系列及びその意味に集中することである。第二は、どのテキストでも、歴史的・状況的・伝記的な脈絡に置かれていることを認めることである。そして第三は、ある記述の意味及び価値が、常に、聞き手や観察者の知っている他の記述とどのように関係しているのかに影響を受けることである。

三、自己及び「主体」における言葉

ここでは、人間の特性を表わすディスコース的手法に関するトピック、即ち、自己及び「主体」における言葉の問題に移りたい。社会心理学においては、個人が、分析の主要な単位として捉えられているため、また、こうした個人の姿や性質を定義することが、自己のモデルや理論を伴うとされるため、これから取り上げる自己及び主体における言葉の問題は、社会心理学にとっては極めて重要な問題領域になる。

Potter & Wetherell (1984, 1987) が、ディスコース上の自己に関して、示唆に富んだ研究を行なっている。彼らは、社会心理学及び文学におけるセンス・メイキングの問題を強調した。文学と社会心理学とは、一般に考えられているほど、相互に排他的なものではない。両者における「自己」の捉え方を例にとって考えてみても、その複雑で広範囲にわたる研究史上の様々な変遷の節において、両カテゴリーはむしろ、驚くほど重なり合っているのである。

文学に関して言えば、小説は人間を人格としてしか描かないようなプロットと登場人物にのみ注目するようなものから、ドストエフスキー的人物が持つ鋭く分裂した意識を描くものへと次第に発展してきたのである。同様に心理学においても、人間に対する見方は確固たる物語的人格という考え方（例えば、社会心理学における役割演技者、あるいは、パーソナリティ研究における特性論的アプローチ）から分裂した自己及び複数の社会的自己という考え方へと移行

してきたと言える。

従来のモデルの基盤となる仮定は、自己が単位であっても、他の如何なる単位や自然的物理的物事の場合と同様に、終局的には説明することができる。言い換えれば、自己には一つの真の本質があると仮定され、あるいは自己における特徴のセットが発見されたら、それらに関する正確な説明が必ず伴うと仮定されるということである。しかし、本論では、自己の問題を追究するために、最も有効な分析方法とは、自己の現象と本質、あるいは、その内容と構造を明確にすることよりも、むしろ、自己言及の言葉（文学における言葉にせよ日常会話における自己言及にせよ）の検討であるという結論に導きたい。

現在、主流となっているのは、やはり真の自己と社会的自己、「I」と「Me」といった分離された自己の考え方である。しかし、現代の分離された自己は、様々なディスコースの内の一つの可能性にしか過ぎないと言えよう。言い換えれば、苦心して作られた言語的構成物に過ぎないのであり、この点は興味深いところである。従って、こうした解釈枠組の論理的・経験的妥当性を論議するよりも、むしろそれらの枠組が特定の社会的脈絡の中で、何故適切な自己描写として発展してきたのかを追究する方が有益である。それは言語的資源によって、主観的経験に関する全ての領域を説明するしかないからである。自分を様々な異なる性質に分ける個人の能力は、「I」及び「Me」のような言語的概念とそれらを規定するシンタクスの規則及び行動の日常的記述から生じてくる。自己に与えた意味は、外面的行為の観察の結果や内面的経験であるよりも、世界を理解するためのシステムを反映すると言えよう。従って、自己に関するディスコースの構成を検討することが必要となる。さて本論では、自己を検討する際、自己を構成する言葉と言語的慣習、特にそれぞれのナラティブに表われてくる自己に注目したい。人間が内的経験を公に伝えようとする際、それは必然的に当該文化における言語的資源（語彙、文法体系等）に依存したものとなる。それ故、内的経験の意味というものも、慣習的でかつ集合的に体制化されたパターンや意味をなすように、創造的かつ流動的に組み合わせることから生じてくるのだと言えよう。従って、「自己」を分析する際には、自己言及の言語的資源を検討することが必要となる。

四、ナラティブの構造

説明におけるナラティブ的な形態は、真理や厳密さを表わすと見なされる記述を生み出すために、しばしば用いられる方法である。本論の文脈で言うと、ナラティブの構成に関する慣習によって、まさにこのような影響が生じるのである。それ故、効率のよいナラティブが語られる際に見出される諸要素及び諸規則を検討する中で、我々がある説明を真の説明であると見なす記述の基準も表われてくる。我々の人生のナラティブが他者にも理解できるようにするためには、効率的なナラティブの規則に従ったものを語らざるをえない。即ち、真実を語っているか否かは、事実よりも、ナラティブの構成

における慣習によって決定されるのである。ナラティブ的説明における極めて本質的な要素は、出来事の組み立てを、第一に関連性や一貫性という点で、第二に時間の流れの中での動きや方向づけの感覚という点で、どの程度表現できるかということである。

人生を眺める際に、我々は細切れのスナップ・ショットを捉えるのではなく、展開しつつあるプロセスを見る。そこでの理解とは、出来事を先行事象と後行事象との文脈の中に置くことである。同様に、自己や他者との経験を持つ際にも、我々は無限に続く離散した瞬間の集りではなく、目標志向的な一貫した系列としてそれを理解する。即ち、人間的行為に関する記述には、時間的次元が必要だと言える。人は人生を関連のない出来事の系列として眺めるよりも、系統的に相互関連したものとして理解しようとする。人生における出来事は、「展開する過程」（'unfolding process', de Waele & Harré, 1976）の脈絡の中に位置付けて、初めて分かり易いものとなる。

あるナラティブが効率のよい（受け入れられ易い）ナラティブと見なされるためには、第一にナラティブのポイント、説明される出来事、あるいは会話のレベルにおける「あるポイント」が設定されなければならない。こうして選ばれた目標点は、常に価値観に富んだものであるために、その結果が望ましいか望ましくないかという評価が必ず包含される。目標点は例えば、主人公の福祉（「私はこうしてすんでのところで死を免れた」）であったり、貴重なことの発見（「我々はこうして恋に落ちた」）、あるいは個人的な失敗（「私はこうして討論を負けた」）等であったりする。

また、MacIntyre（1981）が論じたように、ナラティブには、結果を幸福なものにあるいは不幸なものにすることを可能にする善玉や悪玉が登場するような評価的枠組が必要である。このように、効率のよいナラティブのための最初の規則からして、既に主観的な要素を含んでいるのである。何が適切な目標点となるかは、対話者が共通に抱く価値観によって決まる。そしてもちろん、こうした価値観は、出来事そのものに由来しているわけではない。

一旦、目標が設定されると、それによって記述に用いられる出来事と用いられない出来事とが区別されることになる。無数にある可能な候補は、目標または結果の設定によって大幅に制限される。つまり、ナラティブの構造が「全ての真実」を語る可能性を妨げるのである。理解できるナラティブとは、目標に到達するのに役立つように選ばれた出来事によって構成されるナラティブである。このことがナラティブの一貫性を保証するのである。サッカーの試合のナラティブを例としてあげよう。勝ったチームによるナラティブの場合は、如何にして得点をあげたかということに関連した出来事が語られる。負けたチームによるナラティブの場合は、負けた理由を説明する出来事が選ばれる。同一の試合であるにもかかわらず、試合に関するナラティブは、話そうとするポイントに応じて、異なった出来事によって語られることになる。

以上で述べた二つの成分は、ナラティブにとって欠くことのできないものである。（他にもナラティブを洗練させ、効率を高めるの

に役立つような成分として、第一に出来事の整序、第二に因果の継起の設定、第三に分解を設定するサインがあるが、スペースの限定のためそれを省略させていただくことにした。）

社会生活をうまく行なうためには、効率のよいナラティブを作る能力及び使う能力は決定的なものである。ナラティブの本質的側面は、出来事の間に志向性（出来事が順序よく目標に向かっていくこと）を生成する能力である。しかし、ナラティブ自体は志向的な能力を持っていない。むしろ、相互作用が展開するにつれて持続的に変化していく構成物として、ナラティブを認めることができる。この場合、人はナラティブ自体から情報を得るのではない。ナラティブとは、相互関係の中にいる人々によって構成され、再構成される言語的手段である。この言語的手段は、相互関係の中における様々な行為をあるいは維持し進展させ、あるいは妨害する。その意味で、ナラティブは、より一般的な社会における歴史の機能と同じような機能を、社会生活において果たしていると言えよう。歴史はそれ自体では志向的能力を持つものではないが、正当化、批評そして社会的団結といった社会的目標のために利用される象徴的システムなのである。ここではナラティブの定義は、「一言で言えば、人間とは本質（nature）のあるものではなく、人間が持つものは歴史（history）である」というOrtega y Gasset（1941）による見解に近いものとなる。

歴史と言えば、Metahistory（1973）の中で、Hayden Whiteは歴史的構成物の虚構的本質を明らかにした。歴史的構成とは、必然的に、様々なプロットの作り方によって生ずる故、歴史的事実の伝達様式のどれかが、他の伝達様式よりも不偏不党であり、決定的またはより真実的であるとは言えないと指摘した。そしてWhiteは、我々が現実世界における出来事を一般化する際に、その一般化の種類を決定するのは、我々が日頃馴染んでいる特定の知識の形態であると結論している。

こうした史料編集に関する考えの基盤となるものは、「歴史とは、虚構と同様に、一つのナラティブの形態である」という仮定である。Whiteは、ナラティブの意味内容を定義しなかったが、彼がナラティブを、記録（年代順のデータの羅列的配列）や「ストーリー」（頂点や解決が付け加えられた記録）よりも複雑な、プロットを用いる言語的構成体を指すもの、としていたことは明らかである。Frank Kermode（1975）がいうように、プロットによって、本来意義のない単なる記録に、初めて意義が与えられるものである。「ストーリー」を構成するのは年代順の史料の配列である。その時の問は「その次に何が起こったか」）である。一方プロットによって構成されるナラティブの場合に問われるのは「それらの出来事に何の意義があるのだろうか」という問題である。

：キャリアのレトリック

ある文化的領域において、特定な筋道が共有されれば、可能な自己の側面が表われると前提される。あるナラティブの形式は、他の形式よりも利用され易いという意味では自己ナラティブの形式も制

限される可能性がある。我々は、自分が気に入った人生の形式を選べるほど自由でない。我々の属している文化は、特定のアイデンティティを招き入れ、それ以外のものを拒絶する。歴史上の多くの時代及び様々なコンテクストにおいて、特定のナラティブの形式が常に見出される事実は、それらの形式が人間の相互作用の要素によって産み出されているということを示唆している。日常生活におけるナラティブの形式の働きに注目する際、まず、個人が社会的関係に入るために普通に持つ能力を考察し、次に、対人関係におけるナラティブの機能及び展開を検討した。

自己ナラティブの構成及び自己ナラティブの多様性と社会的有効性の理論は、キャリア上の自己ナラティブによる具体的な分析によって検証された。この際、分析データとしてTerkelのWorkingと鎌田の『日本人の仕事』から十個のインタビューを選んで、ナラティブの形式、動詞とメタファーの利用、そして、ナラティブにおける自他関係という三つのレベルにおいて分析を行なった。第一に、インタビューされた人が職業的キャリアの脈絡における自己ナラティブにどのナラティブ的形式（安定的ナラティブ、前進するナラティブ、後退するナラティブ）を示すのかを検討した。第二に、キャリア上の自己観を描写する際、どのような動詞及びメタファーが記述者によって採用されるのかを追究した。最後に、ナラティブを維持するために、自己が他者との多数多様の関係の中からどれを選んで、述べようとしているのか、そしてこの自己観が他者とどのように交渉されるのか、という問題が分析された。

1．「仕事について話して下さい」と訪ねられた時に、我々はやろうと思えば、仕事に関するあらゆる情報を山ほど、他者に話すことができる。しかし、ここでインタビューされたアメリカ人と日本人の両者は、話を一つの中心的なアイデアに絞ろうとする強い傾向を示していることが明らかになった。ナラティブ研究の用語ではこの中心的なアイデアを目標状態と呼ぶ。インタビューに見られた目標状態の多くは仕事上の核心的自己観であった。例えば、「勝利者としての自己」、「常に自分に忠実である自己」、「一人前の男としての自己」、「戦士としての自己」などという目標状態が表われてきた。人々はこの目標状態をプラスかマイナスに評価する。それによって初めて、ナラティブの指向性（形式）が決められ、目標状態に関連した出来事が記述される。理論的に、三つの基本的なナラティブ形式が挙げられる。それらを、安定するナラティブ、前進するナラティブと後退するナラティブと言う。安定するナラティブとは、人が評価の基準に関して本質的には変わらないように、出来事をつなぐナラティブである。例えば評価尺度のプラスの頂点では、人は「私は以前と同じように魅力的です」と判断し、マイナスの頂点では、「失敗するのではないかという恐怖がいまだに付きまとっています」と判断する。または、我々は評価の次元にそって、前進や後退の特性を表わすように経験をつなぐことができる。例えば、ある人は「私は今、本当に内気を克服しようとしていましたが、今や人々に対して、もっと親しみやすくて、心を開けるようになりました」と思い、目標状態に向かって前進するナラティブを構成する。ある

いは、「私は、昔とちがって、もはや、私の人生をコントロールできない」という感じを抱き、目標状態から後退するナラティブを構成する。

キャリアの挑戦的なコンテクストにおいては、アチーブメントが重要視され、期待されているために、人々はその期待に応じて自己ナラティブを構成する。例えば、以上で述べた、インタビューされた人達の目標状態は、明らかに評価尺度のプラスの頂点を占める。そして、その目標状態に達成するように、前進するナラティブの形式が構成されていました。即ち、話し手によって選ばれた目標状態及びその価値観が、終局的にナラティブの形式そしてナラティブに登場する関連した出来事を決定し、自己ナラティブに一貫性及び方向性の意を与える。

2. ナラティブの目標状態と形式を維持するために、そして職業的キャリアの中によりダイナミックな自己観を表現するために、人々はどのような動詞やメタファーを使っているのかという問題を分析した。

以上のMcGuire（1986）の動詞分類体系を元にして、まずインタビューされた人達が、主に使っていた動詞の種類を分析した。その結果、全動詞の中で、状態動詞よりも、動作動詞のほうが大幅に用いられていると言えよう。職業は帰属された地位よりも達成された地位の領域であり、自己をその性質（what one is）よりも実行（what one does）によって、そして抽象的な状態よりも具体的な

全動詞
- 状態動詞
  - 既成状態（例、特性を表わす、置かれている）
  - 生成状態（例、試みる、上達する）
- 動作動詞
  - 顕在的行動
    - 身体的作用（動く、食べる）
    - 社会的相互作用（話す、助ける）
  - 内潜的反応
    - 認知的（思う、関心を持つ）
    - 情緒的（好む、感じる）

全動詞
- 肯定
- 否定

実行によって考えさせる領域である。しかし、自己表現をするために状態動詞が利用される際、アチーブメントに向けられている仕事の文脈が、自己が既成状態よりもダイナミックな生成状態によって確認している。そして、動作動詞が用いられている時は、顕在的動詞より内潜的反応のほうがよく利用されている。それは、職業的キャリアの挑戦的な環境が、体験を分析したり評価したりする活動的な内面の人生をもたらしめる精巧な自己観を育むからである。そして、内潜的反応の動詞の中では、認知的動詞に比べれば情緒的動詞の度合いが大きい。それは、キャリアの挑戦的なコンテクストは、環境条件を単に認知的に心に銘記するだけではなく、さらに体験を情緒的に評価することを必要としているからである。

このような動詞の利用によって、極めてダイナミックな自己観が構成されている。また、本研究の分析ではこの自己観が戦場のメタファーによって維持されていることが明らかにされた。キャリアの文脈の中には自己を毎日戦場に出て行く戦士として表現する傾向が

アメリカ人と日本人の両者によく見られた。例えば、アメリカ人の一人は「会社っていうところはジャングルなんだよ。ジャングルに我が身を投げ入れ、生き残るために休むことなく戦いつづける。生きるか死ぬかの問題なんだ」と話していた。一人の日本人は「事情を知らない人は営業が花形だっていいますが、決して華やかな職場じゃありません。戦場ですよ。」と明言している。

しかし、それらの動詞やメタファーの利用は、ナラティブの形式や公的に確認させようとする自己観に勢力を与えるための一つの手法（レトリック）に過ぎないということを常に念頭においておかねばならない。文脈に従って、社会に受け入られる自己ナラティブの形式が限定されていると同様に、それに応じて利用しうるレトリックも限定されているのである。

3．自己ナラティブを構成するための、様々な自己・他者関係が様々な手法によって利用されている。しかし、その多様性にもかかわらず、関係性の利用が自己ナラティブにおける目標状態の設定によって限定されているということに注意すべきである。目標状態及びナラティブの方向性が一旦設定されたら、関連した出来事が目標状態の達成と方向性を維持するために選択されている。自己ナラティブに登場する他者もその役目を果たしている。分析したナラティブにおいては、一般的他者という他者の種類が広範に利用されている。この際、一般的他者の役割は、自分の立場（特に自分は劣った立場に置かれている時）を相対化するための比較の基準となる。例えば「けっこういたんですよ、ぼくみたいなのが」、あるいは「野球の選手だって、三割以上はあたらないんだ」、または「失敗しない人に会ったことはないんだから」。また、一般的他者の微妙な利用は、他者を通じて自分のことを語ることである。この場合、他者のことを語っているのか、自分のことを語っているのかを区別することが困難である。

アメリカ人と日本人によるナラティブの間に相違が表われてきたところは、自己・他者関係における関係の指向である。アメリカ人の自己ナラティブにおいては、話し手は「他者にとって自分は何者か」という立場（自己→他者）から他者のことを言及する。例えば、部下に対しては自分はどういう上司であるかがよく描写される。父親気質を示すと同時に、彼らと平等であろうとする人の自己ナラティブが典型的にその性質を表わす。しかし「自分にとって他者は何者か」について語る時に、それは殆どの場合否定的である。例えば、他者は敵であり、自己は他者に負けているというように、他者は競争相手であるとき、特にその傾向が見られる。

日本人の自己ナラティブにおいては、その逆の指向（他者→自己）が見られる。即ち、「自己にとって他者は何者か」という対人関係のほうがよく描写されている。部下のことにはあまり言及せず、上司から得られる暖かみのある保護的な感覚の表現が多用される。例えば、「上司に恵まれていた」という文章がよく見られる。その特性のため、ナラティブのレベルでは一種の受動性が感じられる。

特に注目すべきものは、自己ナラティブは個人的な行為でありな

がら、共同的な行為である。効率の良いナラティブを構成するために、我々は自由にどのようにも自己・他者関係を描くことができるわけではない。自己ナラティブに一貫性を保つためには、ナラティブの構成の中で働いている公的演技、交渉そして仕返しのメカニズムを利用しうるスキルが必要とされる。

ここでは、ナラティブの形式、動詞とメタファーの利用、自他関係の三つのレベルで、ディスコース分析を行ったが、現実のディスコースにおいてはこうした三つの側面が協同して働き、相互に維持されていることによって、初めてキャリアのレトリックに説得力が与えられている。

「仕事について話して下さい」という問は、「本来」、仕事の描写（description）を招くはずだが、それよりも仕事の中における自己観の言明（avowal）が得られている（Wittgensteinが描写と言明の類別を指摘した）。即ち、インタビューされた人は第一人称のナラティブを行なうほうを好むと言えよう。我々にとっては、講話をするよりもナラティブを構成するほうが容易で自然なものに感じられることがその現象の説明となるだろう。即ち、単なる描写的記述や事実の記録を行なうより、プロットによって出来事の展開に意味や目標を与えるように習慣づけられている。

分析の進行につれて、ナラティブを語るプロセスとは、決して自律した独立の個人による行為ではないという事実が明らかにされた。まず、行為者のナラティブを理解しやすくする能力は社会・歴史的文脈に深く関わっていることが示された。即ち、ナラティブを語るために、我々は既成の社会的秩序における特定の性質に頼っているのである。次に、自己ナラティブが、シンボルの共有、社会的に受け入れられる演技、そして持続的交渉によって決定されていることが論じられた。最後に、ナラティブが様々なアイデンティティの織り込みを必要としており、我々にとって相互作用の社会的領域において他者の共演が必要であることが明瞭となった。要するに、ナラティブを語ることは、独立した個人による行為ではなく、相互に調整し合い、互いのナラティブに共演する対人関係の結果であることを指摘した。

五、文法上の自己

以上の分析では、職業的キャリアの普遍的脈絡における基本的なナラティブの構成及びレトリックの使用に焦点を合わせて、対人関係の側面以外に、文化的差異が見出されなかった。ここでは、文法上に示された自己表現の特徴について、私小説のような告白的文学の作品を資料にして分析した。特定の自己や主体のイメージを可能にする文法的な側面、特に代名詞及び言葉のあやに注意を払う故に、文化的差異を対照し、西洋におけるIch-romanそして日本における私小説のそれぞれが現わす特質を手短に検討したい。

著者は、私小説一般、特に太宰治に関する学士論文を準備した当時、様々な問題に遭遇した。それらの問題を簡単に述べれば、日本の私小説を、ヨーロッパ的観点から定義することは不可能に近いと

いうことであった。それは概念、言葉とその意味に由来するものだと考えてきた。例えば、西洋人に比べると、日本人にとっては、真実及び虚構、または主観性及び客観性のような基本的な概念に、異なった意味が認められている。日本文学における誠実性（authenticity、真実らしさ）が西洋の日本文学者によって‘accomodated truth’調整された真実と名付けられている。または、日本的自然主義では、ものを客観的に描写するためには、経験を主観化しなければならないという、西洋人にとって矛盾している信念が認められている。こうした現象を如何にして説明すれば良いだろうか。

英語のようなヨーロッパ言語における文法の極めて重要な性質の一つは、代名詞、修飾上の変則や時制の設定によって文章の主語の特性が明白に決定されることである。例えば、自分を様々な異なる性質に分ける個人の能力は、ヨーロッパの諸言語における「I」と「Me」のような言語的概念とそれらを規定するシンタクスの規則から生じてくる。具体的な例を挙げれば、英語で言う‘I talked myself into it’, ‘I made myself do it’, ‘You are deceiving your self’などは、こうした自己描写のための文法的工夫が実際にどのようになされているかを示している。それぞれの例では、話し手が、ぐずぐずしていて言うことを聞かない自己と、力と自制心のある自己という二つの自己を作るために、英語の主体・客体の特性を用いている。

西洋人にとっては、代名詞というものは、分離された自律的な存在を意味し、自己と他者との間に消すことのできない境界を定めている。一般にヨーロッパの言語では、三人称で私小説を書くことは、不可能に近い。自己を「he」か「she」という代名詞で指示しようとすれば、文章の中にその目的が明確に指示されなければならない。ヨーロッパの私小説では、普通、一人称の語り手しか主人公と同一視されていないからである。こうした読書の慣習は、「he」、「she」という文法的制約と指示的制約の産物である。言い換えれば、ヨーロッパの言語の文法では、一人称と三人称の区別は外的語り手と内的語り手の区別に応じている。ここから、文学作品に認められている観点と態の区別、そして著作者、語り手と主人公のそれぞれの役割と実在が確認された。

それに比べて、日本の私小説における語りは、語られる主体と語る主体の類別を持たない単一な意識の語りのように見える。日本語の文法、特に日本語における代名詞の特殊な使い方が日本文学における主体志向的語りの現象を説明することができる。日本語では、文法的印及び時制的印の欠乏によって、主人公と語り手は容易に同一化してしまう。

「自分」という再帰代名詞の使い方の例を挙げよう。文脈によって、「自分」という再帰代名詞は、第一、第二、あるいは第三人称を意味していることがある。最初は、第一人称のナレーションとして読んだ本文が、実は第三人称のナレーションとしても読むことができたという妙な発見をすることが少なくはない。本文のどこかに、主人公の名前あるいは「彼」という代名詞が現われてきたら、全本文が第三人称のナレーションとして読むことができる。しかし、日

本語の場合、英語で必要とされる人称と動詞の活用が欠けていても効率よく働いているために、このような積極的な確認物が本文の中に極めてまれにしか現われてこない。第一人称が利用された場合にせよ、第三人称が利用された場合にせよ、ナレーターが簡単に主人公と同一化されるのである。

ヨーロッパ言語における文法の極めて重要な性質の一つは、代名詞、修飾上の変則や時制の設定によって文章の主語の特性が明白に決定されることである。ここから、Todorovのコミュニケーション・モデルにおける著作者・読者のパラダイムそして著作者、語り手と主人公のそれぞれの役割と実在が確認された。それに比べて日本の私小説における語りは、語られる主体と語る主体の類別を持たない単一な意識の語りのように見える。日本語の文法、特に日本語における代名詞の特殊な使い方（第一、第二、第三人称の種類の多様性の結果として主体の分離した独立的存在が成り立ち難くなり、自己と他者との間の境界がぼんやりとなる）そして「書かれた記録的文体」の優先的利用が日本文学における主体志向的語りの現象の理解に光明を投じた。文法的印及び時制的印の欠乏によって態と観点が必然的に集中してしまうため、主人公と語り手は容易に同一化してしまう。従って、書かれた記録的文体を優先する日本語の文芸作品に適用させるには、記録者・証人のパラダイムと呼ばれるような新しいパラダイムを見出す必要があった。この記録者・証人のパラダイムは西洋文学における非記録的文体の表象的著作者・読者のパラダイムとは全く異なるが、ディスコースのコミュニケーション的話し手・聞き手のパラダイムには近似していると考察した。

結　論

キャリアのナラティブの分析結果から、ナラティブを語るというhuman sense makingの基本的な働きが両文化に現われてくることが示された。つまり、人間性を理解するために、ナラティブがパラダイムとして採用されるという前提が検証された。次に、私小説の文法的特徴の分析結果から、西洋と日本における私小説との間の「誠実性」の相違を決めるものは、それぞれがどの程度に誠実性の「本質」に近似しているのかという問題ではなく、むしろ、それぞれの文学作品に表われてくる「誠実性」が文法体系に限定されるディスコースの様式としてどのように操作されているのかという問題だと理解する必要があると分かった。即ち、分析の結果として、異なった文化が極めて異なったナラティブを構成すること、そしてこうした異なったナラティブをその内的ダイナミックスの条件から認めるべきであることが明らかとなった。言い換えれば、従来の理論のように、互いに理解不可能な基礎認識論に文化的差異を帰着させしめるのではなく、その文化のディスコース内部の視点を取ることによって異文化理解の道が開かれると言えよう。

参考文献

Burke, K. (1955) *A Rhetoric of Motives*. New York : George Braziller

de Waele,J.P.& Harré,R. (1976) 'The Personality of Individuals' , in R. Harré(Eds.)*Personality*. Oxford : Blackwell

Gergen, K. J. (1973) 'Social Psychology as History' ,Journal of *Personality and Social Psychology*, 26 : 309−20

Harré,R. (1979) Social Being : A Theory for Social Psychology. Oxford : Blackwell

鎌田慧 一九八六 日本人の仕事 平凡社

Kermode,F. (1975) *The Sense of an Ending:Studies in the Theory of Fiction*. London : Oxford University Press

MacIntyre, A. (1981) *After Virtue*. South Bend, JND : University of Notre Dame Press

McGuire, W.J. & McGuire, C.V. (1986) 'The Self in Society : Effects of Social Context on the Sense of Self' , *British Journal of Social Psychology*, 25 : 259−70

Ortega y Gasset,J. (1941) *History as a System*. New York : Norton

Pepper, S. (1942) *World Hypotheses*, Berkeley : University of California Press

Potter,J. : Stinger,P.& Wetherell,M. (1984) *Social Texts and Context:Literature and Social Psychology*. London : Routledge and Kegan Paul

Potter, J. & Wetherell, M. (1987) *Discourse and Social Psychology: Beyond Attitudes and Behaviour*. London : Sage Publications

Sarbin, T. R. (1986) (Eds.)*Narrative Psychology:The Storied Nature of Human Conduct*. New York : Praeger

Terkel, S. (1974) Working.New York : Avon.スタッズ・ターケル(訳者) 中山容他 一九八二 仕事 晶文社

Todorov, T. (1977) *The Poetics of Prose*. Trans. R. Howard, Ithaca : Cornell University Press

White, H. (1973) *Metahistory*. Baltimore : John Hopkins University Press

Wittgenstein,L.(1963)Philosophical Investigations(G.E.M.Anscombe,trans.)New York : Macmillan